



權けん種しゅ 兵衛べいゑ 前まへ 論ろん

服部應賀著

伴紫翁



定價三錢五リ



官許明治七年三月廿九日

夫培養の草木菜瓜の苗と榮育たる
 のもろくは花と實の色ともあり味とも
 るるものへ殊ふふや一其あや
 畑物の食ふふふに其あや
 一小時あり其時の若芽と
 りの此時と忘れが益あり
 人も學文するの道理ふら
 一其まふふ小時あり其時の
 幼きふあり老るるを老學の
 古人をさして其時を忘るる童の
 成人て悔あると又教導と耕作との其則の
 ひとしきと迷て學社の繁茂を祈るふと我



權兵衛種蒔論

服部應賀著

方今開明の善政敷多行いせらるる中不専ら學校と
 御設營あるの國人最大の幸福あるがもへ不遂不邊土の
 官士庶人まで自費の學社を競立たるはこそ方代強國の
 基ひ總明俊傑の苗を生けて佳實を得種蒔ともいふ
 可歎きまへ茲不或都會の村長自力を奮發して千
 町の荒野不續く市中の古院を學社ふけりしとめて

匹夫野人の童男童女鰥寡孤獨の習學所と成る由へ
近郷の福者をとらめ其日稼の者までも此大業を
悦びて助力の金貨と投つけま忽ち落成の上
或日投金の者へ村長より奇特と報ふ賀宴を
きえければ貴賤美豚の袖を翻して大殿小群會
まると見て教者の某上坐の村長の前へいで貴長
の大業貫通して今日の賑ひ斯のごとくは夫の
つき當所の大家種蒔權兵衛ある者の近郷一の
福農おてありまはるる大業と見て今日まで一

錢の助力もこそあきもへ斯貧民も連面する坐中へ
呼よせし守錢奴の耻名を冠らせときと述けまは
其儀然べりうらむも學文の第一の己を慎み偏執の
心もくちあむるの教るれば渠が出金あることと聊恨ま
渠ハ農家るがらも義理ふあつるく殊小耕作小委
しけまは毎年の收納も他の一倍を得をもつて
種蒔とも俗称をれば吾菜菓穀の三品の種を渠ふ
託して此地小蒔せ土性を試さければ今日此席
へ来と約せばかろは過言あるまどといまむ

折々大福長者と呼びても千早ふふ着て種
蒔権兵衛大勢の美麗の中にも恥らひて上坐へ
行ハ村長會釈してりふやう一にざく尊来と乞
しの外るは吾々も三品の種ありと渡し夫と
此荒地小蒔て土性と試られよと頼けとバ取あへ
権兵衛荒地へ出荆棘瓦石の中ともいと云は無
心不蒔ぢらうけとびあさりの群雀鳥も来りて
啄と大勢の童是を見付てあれよ権兵衛殿が蒔
種と鳥が別る誰かへくもとへホと追ふと見て村

長惘なまねしうち権兵衛元の坐小戻りてりふやう一頼
おまうせ種の蒔しが生るとぬい此學社と見て知
べし吾耕作小倥偬し外用あるが暇多くと立退と
お止てとめ司し不作法ありを田畑を作小先其地
の荆棘と刈瓦石を除きつぞ耨耕して種を蒔培養し
てあま雑草を拔ざればせん繁茂して實らぬのを今其許が
蒔と見るふ一ひと鋤の穿もあつくあつく芒々たる草の中へ種を
蒔てらいうとせん繁茂の秋あらんまうる小生る生ぬい
此學社と見て知れといせん麤暴あり吾われ微力と抽で

此學社を營ぐべし貧夫賤婦といふるも心私糧の
うちを助カせし有志の面々此坐にあはるる農事
ふ委き其許の意趣と的の面々聞くと敦圉らうと
迷けしは權兵工臆たる貞もあく恭然として再
び坐し雅丈吾業の耕作の順序を述べて吾を
責が吾ハ又此學社ハ順序を論ん為粗暴ハ
種を蒔て見せし其意趣いまださうらびに語るべし
柳田畑と耕して佳實を得る學社を建て才能の人を
得る其手段ハ同一なるも先學社を營むハ其地

ふ蔓ぐる鄭声淫肆の荆棘と刈大道に墾ぐ不
正の品の尾石を除き男女區別の席と耨耕一無
心の童の種として繁茂の苗ハ培養する唯教者
の丹誠而已也やもよき色ハ悪郎無智の童と欺る所
持の品と心又悪才とめぐる宿所より金貨を
取せて酒食とあり或ハ悪所ハ伴ふあり是則執草
あり近頃政府の學校ハ是等と儼く
御穿鑿ありて三人の執草を抜捨万生の佳苗ハ害
るきを惠する難有とあらば諸苗修行の



ひろげく多年の學費と暇を費し重荷を脊負ひ
 冥府の土産小持行者あれども願くは國家の益み
 此世の置土産とあり
 かりおせば勞して
 効ありと

西 六乃の辻
 南 高天原道



世の中小學文よる者多くは孟母の機のおとく半あり止自他の益みたぬ
 費ありまじ
 老少不定ハ格別凡壽小限あるとも
 又さま入内
 外の學文小幸と

博學

和漢書籍
 西洋六箇史記

根をよく張がゆへ終つ一粒万倍の才智を合あて
實者ありまゝの件くだの順序しゆりふをりて放埒やうら
お修行と遂ま警へ博學はくがくふ至るとも身を脩しゆること
とあらぬのまゝ及およて大害を醸かふいふ昔より天下
お謀叛ぼうはん一主家と望のぞ一者皆愚昧ぐまいあらぬと一人と
して逆意ぎぎいと遂まて誅ちせらるぬ者なきは諸家の傳
記きふくくあり誠まことお教者の懇切こんせつと思ひ又親
より附與ふよする學費がくひの多きをかぞへ又永年えいねん己おのれが
暇ひまを費つひせしと顧うらみ時ときの中なかく疎そふはなすぬりのと

唯一心の納な処じょ悪あくを而のて多おほ藝ぎありて世よに廢す
り無藝人むぎにんお劣おとりの少すくくは是こゝに根元ねもとを尋たづむべ
其荆棘きせきと犢草とくそうの害がいありまゝ近頃きんぎん當所たうじよの景況けいけいを
見みるお其荆棘きせき瓦石わし充滿ちゆうまんする中なかへ無心むしんお學社がくしゃを
營いるときは寂前じやくぜん吾時わとき一ひと種しゆのごくあり万まん一いつ苗なハ
得えるともあは實じつとらうとあるを論ろんとと答こたへ
は村長むらぢやう坐ざと下くだつて權兵ごんべい上じやうと禮らいし誠まことお貴身きみみの
我師われしあり聊いささ嫉妬しやくと偏執へんせつといごうど今いまより疎志そしを
あらとめて尊命そんめい徒たへども其荆棘きせきお譬たとふ渠等みづらの

永年泰平の余澤を甘んじて身不染るる生活
なれば今更川の志あるべしや種コハ思ひもよほ
無物躰も當今 上おも旧習の弊を省れて永
代堅固の國益を慮らせりかかむへ高祿の大家も厚
天意を奉戴し多ハ警飾も放て單歩の御身とある
士族も既も庶人も入と渠等是と知あらず改業せ
ぬい患ありさなり吾も貧民とせしめ其贅藝
人等が生活の為此千町の荒地を開墾して其夫
籍と新編いふととへハ長莫太の御に施ふて

上の國家の大益下の庶人の廣益殊も高の末ふ
て農のえられ無能無才の者の農も歸せれば末代
安一國土も害にる藝の知らざるも志るんをさして
自改業の力あき者の其夫籍も入る人此學社の上
田也今般 政府も於て家祿奉還の多人へ山林諸
地も畧賈を以て御拂下の命ありし誠も肉親の
子と思ふが如き深慈の御配慮あるところと語るが
大殿を見よとせば始の衆人權兵衛の行躰を見て謗
て大声も笑ひけるが今大殿水で打とるおとくお

静りしづか—其末坐しんざより柔弱じやくじやくの若者わかものをいひて權兵衛ごんべゑの
前まへに述のたまはるる歌「私わたくしの御當所ごとうじよに住すまひ歌舞かぶまき者もの候まをが同
業ごうごうの者もの學校がくこうへ獻けん金かねを致いたせしこととき私わたくしも冥加めいがの爲ため
御當所ごとうじよへ上あ金かねといひとさんと既すでに懐中くわいちゆういせし處ところ只ただ今いま貴あなた
君きみの御教解ごきやくかいを承うけたまり恐縮おそそく肝顔かんがん仕つかはる誠まことに仰おほのびとく私わたくしも
ぜいの者ものの正學せいがくの妨まげげもへ學校がくこうの荆棘けいせきといひ宜よろし御警ごけい
おそれるることが鄭声ていせいの淫えんふしを雅樂ががくを乱みだはると古人こじんも
いへり尤なほ此こゝ藝ぎ昔むかしの質朴しつぱくふて芝しばの上うへふて今いまの豆蔵まめくらのおと
くみ手業てわざといひしことに投錢なげせんを項かたきしが愚民ぐみんを論ろんじて勸善こんぜん

懲惡ちやうあくの道みちもいふとて免許めんきよを蒙まかり座ざを建興けんかう行まかふ及および
一ひとが次才つぎさいくみ奢おごり又また文作ぶんさくも淫事えんじふ流ながれて今いまハ勸すす
懲ちやうの二字ふたごの上下じゆうじゆうして懲善ちやうぜん勸惡こんあくのいろめきありとく
見物けんぶつもとく風俗ふうぞくの乱みだしきと好このめつりやど制禁せいきんを入いれ
らるることも則すなはちをわらふ此こゝ藝ぎあり先般せんぱん復古ふこの御沙汰ごさたも
あはれ我われもいふ昔むかしのおとく芝しばの上うへふて質朴しつぱくの手業てわざも
いふさば正學せいがくの妨まげともあるまじけきとそれゆゑに日ひかゝり
奢おごり移うつれが私わたくしの藝ぎ人の魁かゝれ小真せうま以もつての完化くわんかふ上金じやうきんふりも
正せい小學校せうがくの御為ごためと思おもひて親讓おんじやうの業ごうごうを廢やめし且かつ是こゝま心こゝろ農のう

業の辛苦も志し、く 己こ 不ふ 珍膳ちんぜん と喰く 飽あ 織績おひ の手業も志
 らば、し 不ふ 賤けん を身み と美服びふく 不ふ 包か せに放逸ほういつ 不ふ 世よ とあらしむる
 その咎とが を報あや ふとめ一心決定いっしんけつぎ して家族門弟かぞくもんてい りろとも不ふ 耕かう
 作さ 不ふ 暑寒しよかん と厭いと ば泥脚どろあし あり身み と働たくら ん又また 蠶養さんやう の業わざ を
 仕習しりやう へ子々孫々安泰あんたい の正業せいぎやう 不ふ 務つと とけしと何卒なんぞ 開懇かいこん の
 夫籍ふせき のうち人御加入ひとみか 願奉ねんほう すと詞ことば を一ひと く述た ぶけを

後号一冊

種時權兵衛群集の親子小春とをぶさ
 身と備ふことと論は各
 早々發兌

權兵衛種時論前号終

明治七年戊五月開板

東京書林

山崎屋清七板

卷之五

五

無名氏